



Best ^{スペシャル} Sound Club
へようこそ

今回は、BSC (ブラス・サウンド・クリエイション)の創始者、加藤朋海氏を紹介しよう。「真打登場」というところである。あるいは「満を持して」と言うべきか。いずれにしてもあのウィントン・マルサリスを筆頭に、世界各国の著名プレイヤーに愛されているBSCのオリジネーターが登場するのは、本連載開始以来初めてのことである。しかも、その手にははるばるルクセンブルグの本社から氏が携えてきた噂のモデルが…

加藤朋海氏と「ニューオリンズ」
(撮影協力:山野楽器ウインドクルー)



TR-106S「ニューヨーク」と、TR-601「ニューオリンズ」

《音楽》を考えると 《作品》が見えてくる

加藤朋海氏は、高校を卒業してすぐに単身ドイツに渡り、かの国伝統のマイスター制度に身を投じて我と我が身を鍛えぬいてオリジナルブランドを立ち上げた…という、万事がお気軽お気楽に堕ちた平成日本にあって、場違いなくらいに痛快な「楽器族」の物語を生きてきた一人なのである。本誌前号では、あたくも「露払い」のようにご両親にご登場いただ

上がBSCの従来モデル。単純にヘヴィにするのではなく、熟慮された位置におもりが装着されているのだ

き、若き日の彼がいかに熱血な「冒険野郎」であり、また同時にいかに沈着冷静な「クールガイ」であったかをご紹介した。

「両親には、本当に感謝しています。ドイツに行く、と決めたときも黙って応援してくれました…」

氏はドイツに渡ってから20数年間



従来のモデルのボトムキャップは内締め式(現在の楽器はたいがい「外締め式」。外から締め付けない、それだけで音が変わる



ヘヴィタイプの「ニューオリンズ」も、やはり「内締め式」だ

というもののほとんど帰国せず、現地でがんばってきた。その原動力となったのは、幼い日から氏に全幅の信頼をおき、暖かく見守ってきたご両親の「想い」である。昨今の、狂気のような「執着」と「無関心」の両極端に揺れまくる「親たち」の姿からはほど遠い、古きよき日本の「おやじ」「おふくろ」の姿がそこにある。

「父は、奨学金を受けながら高校を卒業し、すぐに就職して建築家として活躍してきました。ですが、学歴のことで苦勞したので、僕には絶対大学に行ってほしかったようなのです…ところが、僕自身は申し訳ないことに、高校時代からサラリーマ

ンになる気はなかった…」

お兄様も当時はレーザーとして活躍されており、エンジンを分解しそして組み立てるその様子を興味深く見ていた氏は、できればひとりでなにかを全部仕上げる…そんな仕事に就きたい、と考えるようになった。

そして、たまたまその頃すでに氏は、トランペットを手にしていた。1たす1が2になるように、ごくごく自然に答えが出た。

トランペットを、ひとりで造り上げられるような人になろう。

そして、ドイツで先にマイスター制度を体験してきた先達に紹介されて当時のベルリンフィルハーモニー



一見、マウスピースのように見えるレーザー。パキート・デリヴェイラ (Sax,cl)がふざけてここでバズィングしたら、立派に音が鳴った、という(笑)



親指フックの形状も音質を左右する重要なポイントだ



の首席トランペット奏者、コンラディン・グロート氏を知り、グロート氏が生涯の「師」となる達人、ハンス・シュナイダー氏に引き合わせてくれた。まるで紅海を渡るモーゼのように、氏の前に「道」が拓かれていった。「常に、その世界で一番トップの人に会って、そこからアイデアを学んでいきたいと思っていたんです」

もちろん、「思い」だけでは夢はかなわない。「現実的に夢をリアルに分析しなければ、そこに至る道は見えてきませんよね」

マイスター制度を知ってから、高校時代の氏はドイツ語を学び始めた。まず言葉がわからなければ「修行」もくそもない。徹底したリアリズムがそこにある。

「楽器造り、というのは『こんな音が出せたらいいなあ…』という夢を徹底してリアルに分析して、具体的な『かたち』が見えるようにする、ということなんです」

そんな加藤氏だが、さぞマイスターとしての修行時代に苦労されたのだろう…と思いきや、マイスター修行の苦労話は「ない」そうなのである。

「言葉には苦労しましたがけどね（苦笑）。でも、ドイツのサッカーWカップがあったときに、海外からの客がずいぶんドイツのホスピタリティーに感動していたようなのです。たとえば、駅で困っているヒトがいたらごく自然に隣のおばさんが助け舟を出す…そんな光景があちこちで普通に見られます。僕が通っていた専門学校でも、ちょっと困っていると



神奈川県で暮らす加藤氏の姪と甥も、BSCの愛用者。ふたりとも、実に素直な音色で楽器をうまく鳴らしていた

学校の友人が助けてくれたんです（笑）」

通っていたのは、ルードヴィヒスブルグの職業学校。シュナイダー「親方」のもとで修行をしながらその学校へ週に数日通う…というのが、現地でのマイスター修行なのだそう。学校は学校、親方の修行はその後で…と思っていたら、同時進行なのであった。

「最初にやられたのは、トロンボーンのリードパイプ造りでした。管にいくつものリングを通しながら、微妙な円錐のかたちに成型していくのです。もちろんそれまではまったくやったことはなかったのですが、抽象的な『音のイメージ』と、物理的で具体的な『楽器の形』との関係性は、実際にそうやって手を動かしながら学びました」

かたち、よりも「イメージ」である、と、加藤氏は断言する。「音のイメージがまず、先にあるんです。この曲ではこういう風に、あの曲ではああいう風にトランペットを鳴らしたい…そういうイメージから、すべての『かたち』、すべての部品が決定されていくんです」



奥様とお母様と、そして加藤氏の大好きなお母様手作りの餃子と

まず「音のイメージ」ありき

BSCのトランペットは、さまざまなプレイヤーから「ヨーロッパの響きがある」と絶賛されている。ドイツのクラシック音楽を表現するのに理想とされている「ロータリー」式トランペットの『音』を追求する…というのが加藤氏の方針だった。「ロータリーやピストン、という形式にこだわっている、のではなく、『音』がすべてなんです…すべての形状や部品は、求める『音』によって決めています」

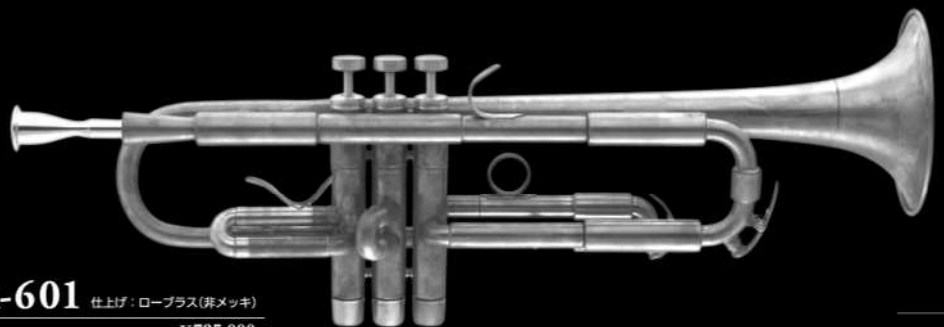
短管式のトランペットには、管の長さを変えるためのさまざまな仕組みが開発されてきた。有名なのがピストンヴァルヴとロータリーヴァルヴの二種類だが（かつてはそれ以外にヴェルリナーやシュトルツェルな

BSC

Brass Sound Creation
from Luxembourg

- TR-501G "WM" ¥703,500 <ケース付> 仕上げ: シルク24K金メッキ
- TR-303S "シンフォニー" ¥417,900 <ケース付> 仕上げ: 銀メッキ
- TR-206S "オールラウンド" ¥302,400 <ケース付> 仕上げ: 銀メッキ
- TR-106S "ニューヨーク" ¥260,400 <ケース付> 仕上げ: 銀メッキ
- TR-105S "ミレニアム" ¥207,900 <ケース付> 仕上げ: 銀メッキ
- TR-C01S "アルマンド" <C管> ¥448,350 <ケース付> 仕上げ: 銀メッキ

ヨーロッパのハンドメイドが培った完成度



TR-601 仕上げ: ローブラス(非メッキ)
"ニューオリンズ" ¥735,000 <セミハードケース付>

※マウスピースは付属しておりません



息子さんはただいま、楽器よりサッカーに夢中



おばあちゃん自慢の餃子（前号参照）を口にすると孫さん。あー、手つかみ！



いつもやさしく見守ってくれる加藤氏のお父様

ど、さまざまなスタイルがあった。氏はそれをすべて学んだのである、「一番音がいい…というのがロータリー式、とされているんです。その『音』をピストン式の楽器で表現する…というのは、それまで誰もやった人がいなかった。ヴィンセント・バックは、それを試したと思うんですが」

ロータリー式を、その構える状態から「横喇叭（らっば）」と呼び、同様にピストン式を「たて喇叭」と呼ぶ風習があるが、決して「横をたてにする」ような単純なやり方では、その独特の音色を移し変える、ということは不可能なのだそう。昔は長い楽器で、ピストンも何もないのに音を変えられる…という、一部の技術者にしか許されない高度な技術で演奏されたトランペットは、それ自体「不思議」で「神秘的」な楽器、とされていたが、このように音を変更する「部分」（ヴァルヴのこと）だけで音色が変わる…という話はやはり「神秘的」ではないか。「形状が違えば物理的な重さや、細かい管の長さが変わりますから、当然『音』も違ってくる。問題は、その『音』が、奏でるべき『音楽』にマッチしているかどうか…なのです。向こうで調べてみたら、かつては各地の村々に楽器マイスターがいて、それぞれ

の土地ならではの形状でトランペットを造っていた、らしいんです」

その淘汰の結果が、いくつかのロータリー式の「伝説的」名ブランドとして今に伝えられている。

「音がそのかたちを選んだんですね。それは、奏者の個性とはまた違ったレベルの話で…たとえばラインホルト・フリードリッヒや前述のグロートなどは、個性はそれぞれ違うが、音に関するイメージは同じなんです。その部分に対する感覚を、大事にしていきたいんです。クラシックを表現する音を明確にイメージしている…一番簡単に言えば、声楽のイメージ。パヴァロッティやカレラスはそれぞれ個性がありますが、同じ種類の『音』ですね。音の真ん中にセンターがあって、それがホール全体に広がっていく…いい磁器を指でたたくと、澄んだ音色がしますよね。そんな感じに、弱い力でもホール全体に響くような、そんな『音』が欲しい…」

では、それはアメリカで発展したジャズの「音」とは違う？

「いい『音』に対する捕らえ方の方向性は同じだと思いますよ。たとえば、ジャズもクラシックも関係なく一流奏者に試していただいた結果をまと

めると、誰もが同じモデルに落ち着くんです。一流、と呼ばれる人ほど、同じところに落ち着く…たとえば、リンカーンセンターのビッグバンドで活躍するマーカス・プリンタップと、ベルリンフィルの現在の首席であるタマシユ・ヴァレンツィは同じ価値観を持っていますね」

商業主義的なジャズとは無縁 本来の「ニューオリンズ」 サウンドをイメージして

基本的には、ヨーロッパ伝統のサウンドをイメージの基本に置くのがBSCの流儀。だとすると、今回氏が持参した最新鋭の「ニューオリンズ」はどういう位置づけになるのだろう。いわゆる「ニューオリンズジャズ」のイメージからすると、かなりヘヴィな（物理的にも、音色的にも）感じがするのだが…。

「世間的には『明るく楽しいジャズ』と思われているのが『ニューオリンズ』のイメージだと思うのですが、それとは違います。ジャズが生まれたあの土地にはもっと深いものがある…と思うんです。ウィントン・マルサリスさんとの付き合いで、そういったものを感じました」

加藤氏によれば、楽器のイメージは「天から降ってくる」ものだ、という。対象となる音楽のことをずっと考えているうちに、ふと、その姿が目に見えだすのだそう。今回の場合は、マルサリスやプリンタップなどの黒人音楽家たちのとのつきあいのなかから、自然に生まれてきたのが、これまでのBSCにはなかった「ヘヴィ」タイプの楽器。

「かなりの部分、マルサリスさんの影響を受けています。ぱっとみるとヘヴィタイプですが、マウスパイプも抜き差し管も、一様に重くしているのではなく、必要な箇所を部分的に重くしているのです」

単に「重く見える」のではなく、重く「鳴る」音を…というのが、天から降りてきた「ニューオリンズ」のイメージだった。黒人っぽい、重さのある、やわらかい音…。

「それには気候も関係しているかもしれません。ドイツは、寒いか暑いか、二者択一の気候。中間がありません。だから音楽も…たとえばベートーヴェンは苦悩から歓喜へ…で、その中間がない。しかしたとえばブラジル音楽は、メジャーとマイナーの中間を揺れている…ニューオリンズにも、そういうものを感じるんです」

ウィントン・マルサリスは「ニューオリンズの街は、黒人の価値観がこのアメリカの街よりも重視されている」と加藤氏に呟いたそう。

「このデザインはそんな彼の言葉に触発され、生まれたんです」

次号では、思いがけない人物とこの楽器との「出会い」についてご報告したい。



The Saxophones Produced by
Kenny G.



シルバー
ダークゴールドラッカー
ブラックニッケルwithシルバーキー

Soprano

¥178,500 ~
¥210,000

Alto

¥147,000 ~
¥168,000

Tenor

¥168,000 ~
¥189,000



日本総輸入元

有限会社 **セレクト インターナショナル**

〒272-0836 市川市 北国分 1-8-2
e-mail : info@select-inter.com

TEL : 047-374-0792 FAX : 047-372-2704
URL : <http://www.select-inter.com>